

斐伊川水系生態系ネットワーク全体構想について



斐伊川水系 水鳥プロジェクト

斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会

1. 斐伊川水系生態系ネットワーク全体構想について

河川を基軸とした生態系ネットワークの形成による大型水鳥類の舞う魅力的な流域づくりに向け、斐伊川水系とそれを取り巻く2県6市2町の望ましい姿と今後の取り組みについてとりまとめたもの。

協議会委員への意見照会を経て、第7回協議会(2020年1月開催)にて承認。

生態系ネットワークとは

生態系ネットワークとは、生物多様性が保たれた国土を実現するために、保全すべき自然環境や優れた自然条件を有している地域を核として、これらを有機的につなぐ取り組みである。

野生生物は、採食地や繁殖の場、休息する場など、さまざまな場を必要とし、それらの間を行き来・交流しながら、個体としての生活史や個体群を維持している。

多様な野生生物が生息できる自然生態系を、健全かつ安定的に存続させるためには、生物の生息に十分な規模の「核となる地域(コアエリア)」、および、それを取り巻く「緩衝帯(バッファゾーン)」を適切に配置・保全するとともに、これらの生物生息・生育空間の「つながり(コリドー)」を確保すること、すなわち、生態系ネットワーク(=エコロジカル・ネットワーク)を形成していくことが有効である。

生態系ネットワーク(=エコロジカル・ネットワーク)の構成要素の定義

コアエリア:

生物の繁殖のための巣や食物を採る場所、休息をとる場所など、保全上中核となる場所のこと。

コリドー:

コアエリアの間の行き来を可能とする環境のこと。

バッファゾーン:

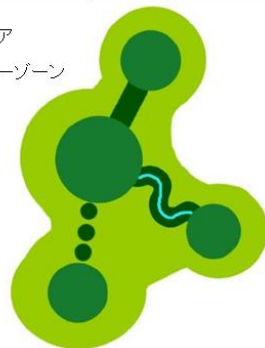
コアエリアやコリドーの周辺地域で、外部からの負の影響を緩和する役割を果たす地帯のこと。

凡例

● コアエリア

○ バッファゾーン

≡ コリドー



生態系ネットワーク形成に取り組む目的

生態系ネットワークの形成は、自然生態系を守り育て、未来に継承するだけでなく私たちの社会活動、経済活動に様々な恵みをもたらす可能性も秘めている。

斐伊川水系を取り巻く自然条件・社会条件は、生態系ネットワークの形成や、自然環境を活かした地域振興を進める上で、全国有数の好条件を備えた地域となっている。

生態系ネットワークの形成に向けた取り組みを行うことは、単に地域の自然環境が豊かになるだけでなく、各機関が連携した取り組みを行うことで様々な地域振興や経済活性化に活かすことが期待できる。

人口減少しながらも、大都市圏との対流をおこすための「内燃機関」の構築・確保

おとずれてみたい、住んでみたい、持続可能なまちづくり



過去に失われた自然環境の保全・再生と、その持続可能な利用

自然環境を活用した土地利用、社会資本整備(グリーンインフラ)の推進

斐伊川水系を取り巻く自然条件

- ・ 斐伊川水系は、ラムサール条約登録湿地に象徴される、多くの大型水鳥類が集まる国際的評価の得られた豊かな水辺環境を有している。
- ・ 特に、わが国の陸水域に生息する希少な大型水鳥類は、①ハクチョウ類 ②ガン類 ③ツル類 ④コウノトリ ⑤トキの5つに大別されるが、これら全てが安定的に生息可能となる潜在性を持つ地域は、斐伊川水系が国内唯一である。

斐伊川水系を取り巻く社会条件

- ・ 生態系ネットワークの推進が、国の主要環境政策として位置付けられている。
- ・ 河川や農地等での関連環境施策の集積が見られ、生態系ネットワーク形成のテーマに基づく官民の広域連携による一体的な活動や事業化を進めるうえでの施設や人材ストックが充実している。
- ・ 現在、佐渡市のトキや豊岡市のコウノトリ等々、大型水鳥類をシンボルとした地域振興が活発化しているが、斐伊川水系では地域固有の全国や海外にアピール可能な資源価値を有している。



斐伊川水系生態系ネットワーク形成の目的

斐伊川水系における大型水鳥類と共に生きる
魅力的な流域づくり

・ 斐伊川水系生態系ネットワーク形成の基本方針

- 1 河川を軸として地域の自然を広げ、つなぐ。
- 2 地域の魅力や活力の向上につなげる。
- 3 人と自然、人と人の絆を深める。

これらの目的と基本方針を元に、斐伊川水系生態系ネットワーク形成の目標として、到達目標（～2050年）、中期目標（～2035年）と短期目標（～2025年）の3つのフレームを設定。

中期目標および短期目標は、生態系ネットワークの形成に関する「生息環境づくり」と、形成を通じた地域振興に関する「地域づくり」に分けて目標を設定した。



全体構想に示した目標(到達目標・中期目標・短期目標)

【到達目標(～2050年)】	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 斐伊川源流部から河口まで、河川・湖沼を軸とした生態系ネットワークが形成され、自然と共存する持続可能な地域づくりが実現している。 ・ 農村地帯では、自然の循環機能を活かした、生物多様性保全を始めとする多面的機能が強く発揮される生産手法での農業が普及し、カエル類やトンボ類、ミツバチなど農村地帯に生息する地域在来の生物が安定して見られる。 ・ 指標大型水鳥類をシンボルとした農産物がブランド化され、流域内外で広く知られている。ホテルやレストラン、道の駅などでも料理や土産物として利用されている。 ・ 生態系ネットワークの形成により、地域在来の野生生物の保全状況が改善され、河川・湖沼において水産資源も安定して得られるようになる。肉食の水鳥と水産資源を分け合う、持続可能な漁業が流域の水産資源ブランドとして、内外に広く知られている。農産物と同様、ホテルやレストラン、道の駅等でも料理や土産物として利用されている。 ・ 全国レベルの人口減少に伴い流域自治体の人口も減少しながらも、一方で持続可能な農業や水産業、観光業等を通じて、大都市圏との人・モノ・情報の対流が継続している。 	
<ul style="list-style-type: none"> - ハクチョウ類・ガン類 <ul style="list-style-type: none"> ・ 引き続き、越冬個体群が維持されており、宍道湖西岸や湖北平野、能義平野を中心に、日中は水田で落穂や二番穂等を安心して採食する姿がごく普通に見られている。 - ナベヅル・マナヅル <ul style="list-style-type: none"> ・ 流域全体で数百羽規模の越冬個体群を形成し、ハクチョウ類、ガン類と同様、日中は水田で落穂や二番穂等を安心して採食する姿がごく普通に見られている。 ・ 流域以外でも西日本を中心にナベヅル・マナヅルの新たな越冬地づくりが実現し、感染症による絶滅リスクが低下。環境省レッドリスト等において絶滅の危機を脱したと評価されている。 	<ul style="list-style-type: none"> - コウノトリ <ul style="list-style-type: none"> ・ 斐伊川水系の流域の圏域各地で営巣・繁殖し、河川や水田・水路などで、年間を通して観察することのできる身近な野鳥となっている。 ・ 全国でも豊岡市以外の全国各地でコウノトリの繁殖個体群が形成され、環境省レッドリスト等において絶滅の危機を脱したと評価されている。 - トキ <ul style="list-style-type: none"> ・ 斐伊川水系の流域を含む全国各地でトキの繁殖個体群が形成され、環境省レッドリスト等において絶滅の危機を脱したと評価されている。
【中期目標(～2035年)】	
<ul style="list-style-type: none"> - 生息環境づくり <ul style="list-style-type: none"> ・ ハクチョウ類、ガン類の越冬個体群について、ねぐらや採食地の保全・再生に向けた取り組みをさらに進め、外敵の侵入などのかく乱に対しても、圏域全体で越冬個体群を安定して支えられる生息環境を確保する。 ・ 毎年数十羽単位以上のツル類が越冬し、周辺水田などで採食している姿が見られるよう、ナベヅル、マナヅルにとって好適なねぐら環境を流域全体で一か所以上確保する。 ・ 流域全体でコウノトリ繁殖個体群の形成、さらに日本全国、および東アジアにおける個体群間の交流に向けた生息環境づくりを進める。 ・ 佐渡以外の地域においてトキの野生復帰の取り組みが始まっている。流域では出雲市等で、自然条件下での営巣・繁殖に向けた取り組みを進める。 	<ul style="list-style-type: none"> - 地域づくり ～貴重な自然環境の価値を基礎として、経済を発展させる～ <ul style="list-style-type: none"> ・ 生物多様性保全型の農業を自治体各地で進め、圏域自治体やJA等の連携のもと流通・販売体制を整備する。 ・ 指標大型水鳥類の生息環境づくりに資する農産物や加工品の商品開発を進め、生態系ネットワークの取り組みの知名度を高める。 ・ 大型水鳥類をシンボルとした自然景観を観光資源としたツアーガイドを養成する体制をつくる。
【短期目標(～2025年)】	
<ul style="list-style-type: none"> - 生息環境づくり <ul style="list-style-type: none"> ・ ハクチョウ類、ガン類の越冬個体数について、少なくとも現状(2015年度時点)を維持できるだけの環境(ねぐら、採食地、休息地)を確保する。 ・ 散発的に飛来しているナベヅル、マナヅルの越冬に必要な環境条件に関する調査・分析を行い、生息環境づくりに向けた取り組みを始める。 ・ 国管理河川を中心に先行的に取り組みされている、生息環境づくりに資する取り組みの効果を検証し、他地域への適用に向けた取り組みを始める。 ・ 雲南市におけるコウノトリのペアの生息・営巣条件について調査・分析を行い、課題とされる点については生息環境づくり、地域づくり両面からの改善に向けた取り組みを始める。 	<ul style="list-style-type: none"> - 地域づくり ～わが国においても希有な自然環境の価値を、地域の人々に知ってもらう～ <ul style="list-style-type: none"> ・ 斐伊川水系生態系ネットワークの取り組みについて、愛称やロゴマークなどとともに、圏域内外に向けた広報を進める。 ・ 中海・宍道湖圏域、および、出雲・雲南圏域において、学校・団体等を対象に、大型水鳥類を軸とした自然環境学習を推進する体制をつくる。 ・ 大型水鳥類をシンボルとする自然景観を観光資源としたツアーを商品化し、年に1回以上は実施する。 ・ 各主体の地域づくりや生息環境づくりに向けた取り組みをマンパワーや財政、広報などで支える体制を、流域内外の事業者などを中心に形成する。 ・ 雲南市におけるコウノトリのペアの生息・営巣条件について調査・分析を行い、課題とされる点については生息環境づくり、地域づくり両面からの改善に向けた取り組みを始める。(再掲)

2. 生態系ネットワークの全国的な取組について

「川からはじまる川から広がる魅力ある地域づくり 河川を基軸とした生態系ネットワークの形成」より

令和5年3月に、全国各地で行われている生態系ネットワークの取組を紹介したパンフレット「川からはじまる川から広がる魅力ある地域づくり 河川を基軸とした生態系ネットワークの形成」（国土交通省 水管理・国土保全局 河川環境課発行）の改訂版が発行された。



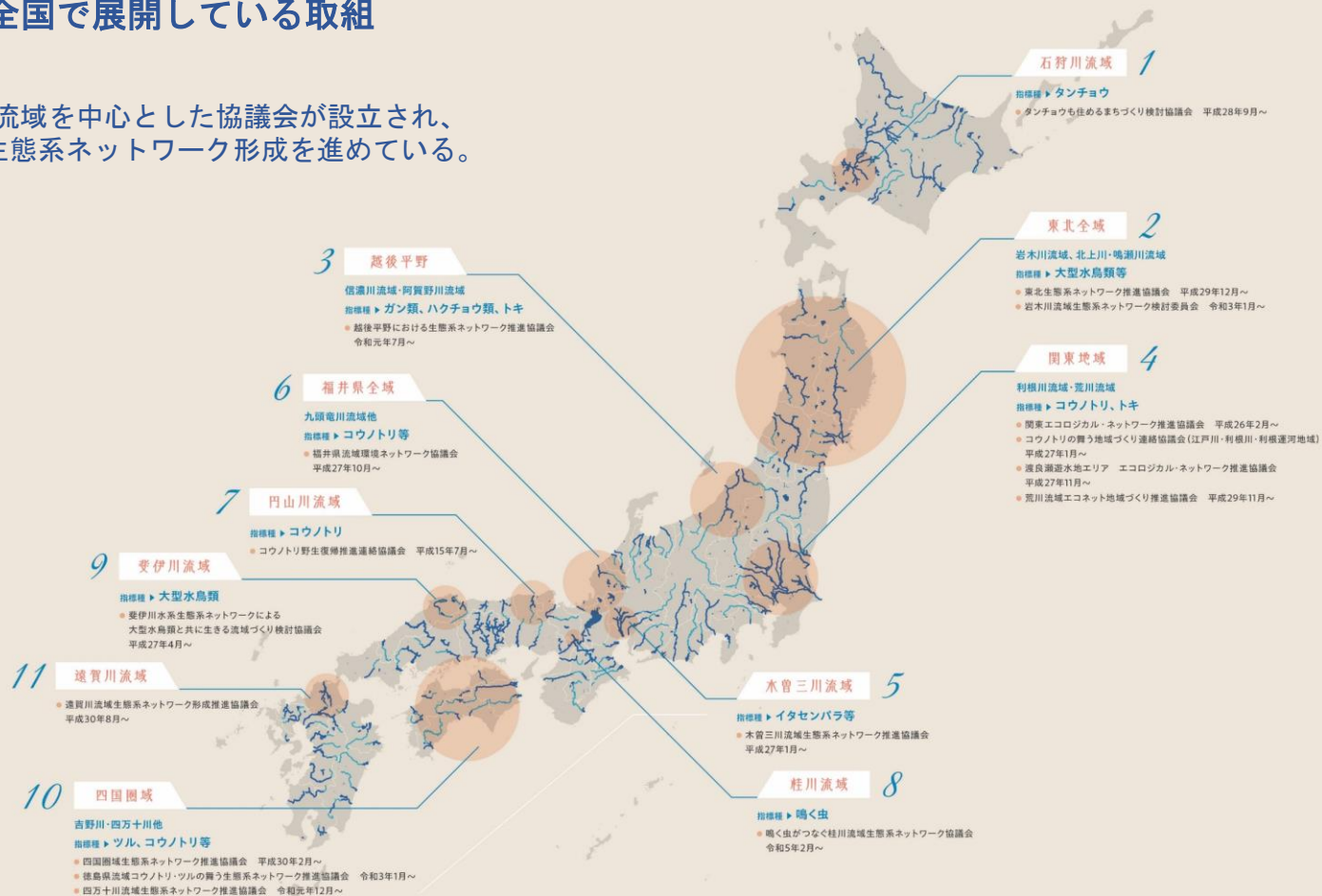
改訂版では、**国土交通省、農林水産省及び環境省の3省の連携**について、下記のように記載されている。

国土交通省、農林水産省及び環境省は、流域の生物多様性の保全、それを通じた流域自治体の地域振興・経済活性化に向け、各省の情報を共有しつつ、様々な取組を進めています。

また、生態系ネットワーク形成がもたらす流域自治体への社会・経済面での効果を、実践事例の紹介を通じて一般に広くお知らせするために、3省連携による全国フォーラムを定期的に関催しています。

全国で展開している取組

流域を中心とした協議会が設立され、生態系ネットワーク形成を進めている。



出典:「川からはじまる川から広がる魅力ある地域づくり 河川を基軸とした生態系ネットワークの形成」国土交通省水管理・国土保全局河川環境課 2023年3月